



学校法人  
鎌倉女子大学

## 「仰げば尊し」のこと

紀子先生から一枚のCDを頂きました。『仰げば尊しのすべて』、キング・レコードから発売されたものです。「仰げば尊し」を独唱、合唱、ピアノ、ギター、オーケストラとさまざまな形式で奏でたもので、大船キャンパスの前身の松竹大船撮影所で制作された木下恵介監督・高峰秀子さん主演の『二十四の瞳』の中で子どもたちに唄われたものも混じっていました。

カバージャケットに、櫻井雅人という一橋大学名誉教授の方が書いた「原曲譜発見と『仰げば尊し』誕生まで」という一文が入っていました。これまで作詞・作曲者不詳、「小学唱歌」とか「文部省唱歌」と総称されるだけでしたので、英語学・英米歌謡民謡論の専門家の手になるものでしたから、早速感心しながら読み始めてみて、初めてこの曲の出<sup>しめつじ</sup>自を教えてくださいました。

その書き出しは、次のような文章で始まります。『「仰げば尊し」は謎の多い歌であった。というのは、『小学唱歌集第三編』（1884）に掲載された楽譜以外に情報が残されていなく、ほとんど何もわかっていない謎だらけの歌であった』。

私も、旋律は西洋音楽風ですし、恐らく明治になって洋楽に慣れ始めた、文部官僚を含む日本人が作曲したものか、「庭の千草」や「螢の光」のようにアイルランド民謡やスコットランド民謡、あるいは讃美歌あたりを下敷きに制作されたものではないかと思っていました。でも、あんないい歌、誰が作ったのだらうと。

ただ、櫻井先生の丹念な調査によれば、そうした想像も根拠のないことが判然とし、ルーツについてはなお判らないまま15年の歳月が流れたということです。近づいたり遠ざかったり、周辺を<sup>わか</sup>渉<sup>しょうりょう</sup>猟しながら辿り着いたのがW. O. パーキンズとH. S. パーキンズという兄弟が編集した『ソング・エコー』というアメリカの歌集。知らない曲ばかりが並んでいる中に“The Hunters”という曲を見つけ、これが本邦<sup>ほんぽう</sup>『小学唱歌集第三編』に収められていた「鷹狩」の原曲であることを確認したそうで、その経緯については、先生の文章をそのまま紹介しておきましょう。そこで、「この他にもここから採られた曲がありそうな予感がして、さらに見ていくと『ソング・フォア・ザ・クローズ・オブ・スクール』にとうとう出会うことができた。作詞はT. H. ブロズナン、作曲はH. N. D. による四部合唱で、主旋律はフェルマータを含めて『仰げば尊し』とまったく同一である」。原曲の誕生は、1870年（明治3）前後か。

ただ、本国でも超無名の曲で、作詞の方は、無論訳詞というわけではなく、敢<sup>あ</sup>えて似たところを探せば、三番の末尾にある“Ah, 'tis a time for fond regrets, / When schoolmates say ‘Good bye’.”が「今こそわかれめ いざゝらば」に当るくらいなもので、作詞は、当

時文部省の音楽取調掛員であった大槻文彦、加部厳夫、里見義の合議によって完成されたものでした。さすがに格調高く、大槻は、国語辞典の『言海』を編纂した人としても有名ですね。

「卒業式に唄う、他にこれ以上の歌はありません」とは、音楽学を専門とする紀子先生の言葉です。

私なども、卒業生の更なる研鑽と活躍を祈って唄い継がれてきたこの歌を、たとえ儒教の精神を背景にした時代性は感じさせても、式典には古色もあってよく、それもまた教育というもので、素直に唄い継いでいけばと思うわけですが、ただ最近この歌を唄うことについての批判があることを知りました。

聞けば、「仰げば尊し 我が師の恩」など子どもに報恩を押し付ける権威主義だ、そんなことをいえるほど自分は立派な教育をした覚えも自信もない、「身を立て 名をあげ」など普通を善しとししない、文字通りに地位と名声に価値をおく立身出世主義だと。最近の日本人は、何につけ随分と小賢しくなったものだと思います。イギリス人が国王を讃美する「ゴッド・セイヴ・ザ・キング」を国歌とするからといって反民主的な国民だとも、フランス人が革命歌の「ラ・マルセイエーズ」を国歌とするからといって官民挙げて暴力行為を推奨する国民だとも思わないでしょうに。

それにしても、真剣に新しい国造りに取り組んだ明治の人たちは偉かったと思いますね。明治維新後、法律、軍事の知識や技術の導入は元より、陸蒸気を走らせ、廃刀・断髪・洋服・洋食、そればかりでなく子どもたちの唄う歌まで洋楽をと、必要と思えるものは何でも学び取ろうとしました。近代政治や近代経済が成立するためには、ハードウェアとしての行政機構や選挙制度、生産装置や為替制度を整備するだけではなく、近代的に成熟した国民の精神性といったソフトウェアが今の時代も不可欠であるわけですが、当時の人々の健気な努力に本当に頭が下がる思いがします。

小学生には所々やや難しいと思える表現が混じっているとしても、やがてはこういうことに気づくことも出来るようになるわけで、子どもの成長を信じて、いろいろな機会に大事な種を蒔いておくことこそが教育のダイナミズムというものでしょうに。

[>前のページへ戻る](#)